

転生 幼女の
悠々自適生活

伝統魔法を使っていたら賢者になっちゃいました

Inuya Mamoru

犬社護

Illust.

えすけー

登場人物紹介

ケンイチロウ

敵か味方が
分からない、
正体不明の男。

アイリス

ポーションに
革命をもたらした、
天才少女。

レパード

黒豹の魔物。
知能が高く、
紳士的。

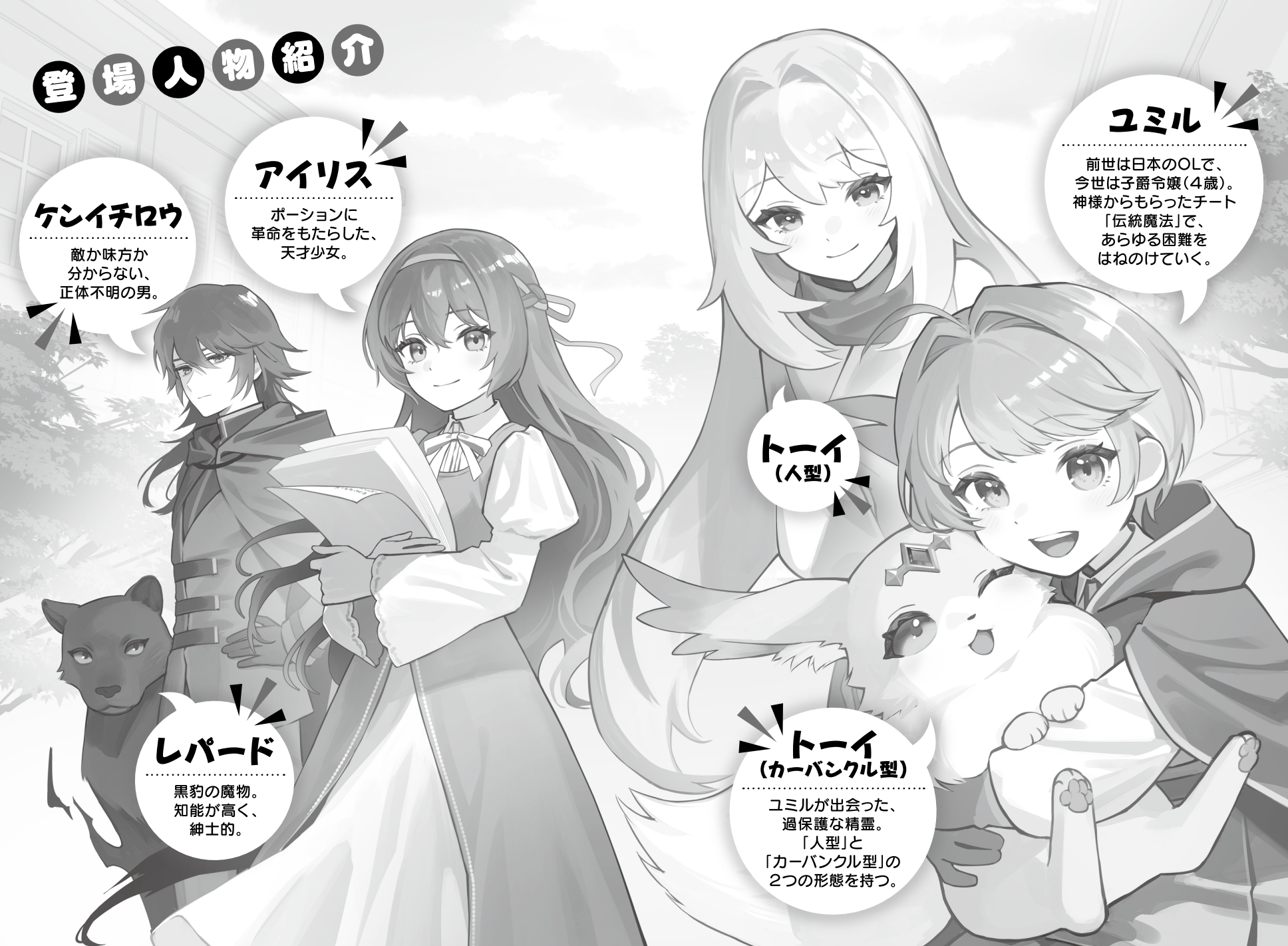
トイー (人型)

トイー (カーバンクル型)

ユミルが会った、
過保護な精霊。
「人型」と
「カーバンクル型」の
2つの形態を持つ。

ユミル

前世は日本のOLで、
今世は子爵令嬢(4歳)。
神様からもらったチート
「伝統魔法」で、
あらゆる困難を
はねのけていく。



第一話 天涯孤独からの出発

ねえ神様、何もこんな時に前世を思い出させなくてもいいよね？ 小さな手足、小さな身体。現世の記憶と人格を保持したままの精神年齢二十五歳、肉体年齢四歳の幼女、それが今の私、ユミル・ルナイスカ。

ああ、そうか。こんな絶望的な状況下だからこそ、前世の記憶と精神が必要なのかな。四歳の子供の心のままこの状況を見たら、どうなっていたのかと思うとぞっとする。

太陽は厚い雲に覆われ、降りしきる大雨と轟く雷鳴、全身はずぶ濡れ状態。ここは崖下になっていて、周囲は一面森に囲まれており、私のすぐ近くには……馬車の残骸があちこちに散乱し、マジックバッグが破れた影響で、家族旅行のため準備した荷物が方々に散らばっている。

そして……二頭の馬、両親、兄の遺体が地面に無造作に横たわっている。事故が起きてからどのくらいの時間が経過したのかわからないけど、私が気づいて以降、三人の位置に変化はない。私は覚悟を決めて、三人の身体に触れる。

「お父様、起きてよ。お母様も眠ってないで起きて。お兄様、風邪ひいちゃうよ？ 起きて」
「お父様、起きてよ。お母様も眠ってないで起きて。お兄様、風邪ひいちゃうよ？ 起きて」

「みんな……冷たい……ねえ起きて……お願いだから起きてよ。一人にしないでよ。前世も今世も、

天涯孤独だなんて嫌だよ」

降りしきる雨のせいかな、皆の身体はもう冷たくなっていった。私がどれだけ肩を揺らしても、誰も目を開けてくれない。

「神様、酷いよ。気づいたら天涯孤独のひとりぼっちだなんて……酷いよ。私は、まだ四歳なんだよ?」

前世、十三歳の時、家族全員を乗せた車で高速道路を走行中、左前輪のタイヤが突然破裂して、バランスを失いガードレールに激突、そのまま突き破って真下に転落した。下が海で、シートベルトをしていた影響もあつてか大きな怪我もなく、私は海水に満たされ、海底に向かい沈みゆく車の中で、必死になってシートベルトを外した。

両親や妹もついてくると思い、割れた窓ガラスから車外へ出て、地上を目指し浮上したけど、そこに家族の姿はなかった。両親と九歳の妹は脱出できずに、そのまま海の中へと沈んでいったと悟り、私の心に絶望感が漂う。家族が海中から助け出されたのは、事故から三日後のことだった。

その事故から高校卒業までの間、私は親戚の人たちからの生活支援を受けながら、生まれ育った家で孤独に暮らし、日々を過ごした。勿論、親戚の人たちの負担を少しでも減らすため、高校生になってからはアルバイトを始めている。高校入学までの間、私は日本の古き伝統と考古学について興味を抱いていたこともあり、その方面での可能な範囲内で業務をこなし、お金を貯めていった。

そして高校卒業後、アルバイト先の伝手を借りて、日本伝統の研究を行っている大学の教授の秘

書として雇われる。二十五歳まで研究のお手伝いをしながら、秘書としての役目を果たしていたけど、旅先の講演の合間、教授と二人で歩道を歩いていると、暴走車が私たち目掛けて突っ込んできた。あの時、教授だけでも助けようと思い、咄嗟に彼を真横に押し出した瞬間、私だけがはね飛ばされてしまい、そのまま死を迎えた。

「神様……助けてよ……」

前世と今世の記憶が、次々とフラッシュバックしていく。今世の自分は貴族の子爵令嬢ユミル・ルナイスカ、幸せな生活を築けていたのに……どうして……どうして、また私を残して皆死んじゃうんだよ。豪雨のせいで、私の絶叫がかき消される。

私以外が致命傷、私だけが軽傷だなんて、数々の偶然が重なったことで起きる奇跡。どうせ奇跡が起きるのなら、前世や今世の全員に適用されてほしかった。

前世の記憶に目覚めた途端、目の前に家族の亡骸^{なきがら}が酷すぎるよ!! これから、どうやって生きていけばいいの? 日本と違い、この世界には魔物がいる。ここは深い森の中、私は魔物に食べられるの? 豪雨の中、私が途方に暮れていると、突然森の茂み^{しげ}がガサガサと動き出す。

「まさか、魔物!？」

あまりの恐怖のせいで、足がすくみ、地面へと崩れ落ちる。茂みから出てきたのは、白いフワフワした四足歩行の小動物。尻尾がフワフワモコモコで、額の少し上から宝石っぽい小さな一本の角が生えている。なんでだろう……この子を見ても、危機感を覚えない。



「あれ？ こんな豪雨なのに、どうして貴方は濡れてないの？」

まるで、雨がこの子を選けているみたい。

「君、今の僕の姿が見えるの？」

「魔物が喋った!？」

喋る動物を初めて見て、ここが異世界なんだと、改めて実感する。

「失礼な!! 僕は精霊カーバンクルさ」

「精霊カーバンクル？」

ゲームの召喚獣とかで、そんな名前があったような気がする。そのカーバンクルさんは、周囲の惨状を視認すると、少し溜息を吐く。

「なるほど、君の置かれた状況をおおよそ理解できた。自分の名前と歳を言える？」

「ユミル・ルナイスカ、四歳」

カーバンクルは、私の瞳をじっと見つめてくる。

「苗字付きということは、貴族か」

貴族が嫌いなのか、嫌悪感剥き出しで、私への警戒を強める。

「幼女だからか、心は綺麗だね」

綺麗って、どうしてそんなことがわかるの？

「君、ここから早く離れた方がいい」

「どうして？」

この子のおかげで、心が落ち着いてきた。ここは魔物の蔓延る森の中、私にとつての安全圏はどこにもない。

「今は雨が降っているから、臭いも遮断されているけど、雨が止んだら、亡骸から漏れ出る腐敗臭を感じた魔物たちが、ここへ押し寄せてくるからさ」

腐敗臭!?

「私の大切な家族に、そんなこと言わないでよ!!」

家族を貶されたと思い、つい怒鳴ってしまう。

「四歳なのに、今の状況を理解しているんだ。まあ、いいさ。君は貴族、本来なら護衛がスキルや魔法で逸早く駆けつけるもの。その兆候もないし、何よりその馬車から異様な悪意を感じる。多分、この転落事故は人の悪意から派生したものだね」

「え!？」

悪意? それって、誰かが馬車に細工をしたってこと? 馬車で街道を通っている時に、突然二頭の馬が暴れ出したのを覚えているけど、そこからは恐怖のせいで、外を見れなかった。護衛だつて三人もいたのに……この事故は仕組まれたものなの?

「ど、どうしたらいいの? 逃げると言われても……」

家族の亡骸を放っておきたくないけど、このままだと私も殺される。ここから逃げたい気持ちも

あるけど、土地勘がないからどこを目指せばいいのかもわからない。

「まあ、そうなるよね。君がこの森の中を彷徨っていたら、真つ先に狙われ、腑を魔物に食いちぎられるだろう」

「ひ!？」

嫌だ……死にたくない。前世の記憶を思い出しても、私には野宿するための知識がないし、現世の両親からスキルや魔法の扱い方すらも習っていない。

「仕方ない、これも何かの縁か。この地で精霊の僕を視認できる人間を久しぶりに見たから、森の出口まで案内するよ。僕と行動を共にしている間、魔物を寄せ付けないようにしてあげよう」

「いいの!？」

カーバンクルさんに感謝だ!!

「僕は、カーバンクルのトイー。宜しく。ちなみに僕は女の子さ」

トイーが右前足を上げたので、私は右手で握手を交わすと、何故か雨に当たらなくなった。

「あれ? どうして?」

「ユミルは、一時的に僕の友となった。精霊カーバンクルの特性は「反射」、こうやってあらゆる作用を反射できるシールドを周囲に張れば、雨に当たらないのさ」

そっか、雨がシールドに反射されるから、ここまで降り注ぐことがないんだ。

「さあ、行こう」

「うん」

ここを離れば、家族とは二度と出会えなくなる。私は勇気を出して、家族の亡骸をもう一度見ようと振り返り、しっかりと見届けてから両手を合わせ、目を閉じる。

『お父様、お母様、お兄様。ユミルは生きるために、ここを去ります。亡骸を放って去ることをお許しください。どうか、天国で私を見守っていてください』

お別れの言葉を贈り、お祈りを終え再び目を開けると……。

「何これ？」

私の目の前に大きな画面が表示されており、そこにメッセージが記載されていた。

【転生特典が発動されました。下記項目から、自分の望むスキルか魔法を三分以内で一つ選んでください】

①スキル「経験値×10倍」

↓戦闘で得られる経験値が通常の10倍

②伝統魔法 一人入手＋転生特典二回追加

※伝統魔法…数ある日本伝統から一つをモチーフにした、自分の悩みを解消する魔法。

突然、変な画面が現れた。

【あと二分】

ちよつと待つて!! トーイに相談する暇もない!! ①は異世界小説でよく見かける定番スキル、

②が意味不明な魔法＋特典付き。どっちが正解?

【あと一分。選択しない場合、特典自体が全て消滅します】

待つてよ!! 私の悩みを解決させる日本伝統って何? 私の悩みつてもしかして家族のこと?

えーい、決めた!! ②を選択します、えい!!

【伝統魔法「御霊送りの儀」を入手しました。行使するには、カーバンクルの力が必要です】

この名称、似たような儀式が日本の神道とかにあった。

「どうしたの? 気持ちもわかるけど、早くここを離れよう」

家族の方を見ている私を見て、トーイが心配してくれている。

「トーイ、私の目の前に大きな画面が、急に出現したの。そこには、転生特典の中からどれか一つを選べって書かれていたから、私は伝統魔法を選んだの。そうしたら、貴方の力を借りれば、伝統魔法「御霊送りの儀」の行使が可能になるって」

「え……」

トーイは、何故か急に黙ってしまう。

「ユミルは転生者なんだね?」

「うん、ついさっき前世の記憶を思い出したの」

なんだろう……トイの私を見る目つきが変わったような？

「とりあえず、ステータスに表示された「御霊送りの儀」を触ってみて」

「わかった」

私のステータスは今も表示されているので、言われた通りに「御霊送りの儀」をタップすると、画面が急に切り替わる。

伝統魔法「御霊送りの儀」

亡骸の魂を神のおられる黄泉よみの国へと送れる伝統的な儀式。こういった儀式はこの世界に十通り以上存在するが、この儀式には異世界の神聖な力が含まれるため、どんな悪意にも干渉されず、亡骸の魂を浄化させ、黄泉の国へ導くことができる。儀式に失敗した場合、異空間を安定させるため、十日間この魔法を行使できない。なお、儀式中であれば、亡骸の魂との触れ合いや会話が可能となる。

詠唱 ……「只今より御霊送りの儀を執り行います」

消費魔力 ……50

儀式に必要なアイテム類

①赤色で御霊前ごれいぜんと記載した白い封筒（亡骸一体につき一枚）

②金貨一枚（亡骸一体につき一枚）

③玉串（亡骸一体につき一本）

④清浄な鏡

⑤精霊馬

※これは、日本のお盆で作られる茄子なすや胡瓜きゅうりで作られる馬で代用可能。

※亡骸に動物がいる場合は、魂を精霊馬に移し、成仏させることも可能。

⑥亡骸と鏡を照らす清浄な光

⑦エレメンタルスキル「反射」

日本伝統とその意味を魔法に昇華させたものが、伝統魔法なんだね。ここに記載されているものを揃えて、魔法を発動させれば、家族の魂を黄泉の国へ送れるってことか。

「トイ、お願い力を貸して!!」

私がトイに、先程の転生特典から起きた出来事と、儀式の効果、必要なアイテム類、消費魔力を説明すると、何故か絶句された。

「聖域の深部に届いた金色の輝き……まさか、神は僕たちとユミルを出会わせるために……」
金色の輝き？ どういうこと？

「どうやら神様は、僕たちカーバンクル族とユミルを救うため、選択権を与えたようだ」

「そうなの!？」

「そして、君は正しい選択肢を取った」

神様は、私を見捨ててなかった? トーイとの出会いも必然だったの?

「君の願いを叶えるため、僕も手伝おう。伝統魔法を成功させ、君の望む埋葬まいそうができれば、今度は君が僕たちカーバンクルに力を貸してほしい」

この魔法が成功したら、家族の亡骸はそのまま放置することになるけど、魂だけは確実に神様のいる天国へ行かせることができる。今の私にとつて、トーイは命の恩人だ。私の願いが叶ったら、今度は、私がカーバンクルの力になってあげたい。

「勿論だよ!!」

「神よ、この出会いに感謝します」

「神様、トーイと出会わせてくれてありがとう!!」

いつまでも悲しんでいたら、家族に笑われる。絶対、儀式を成功させるんだ!!

「ユミル、伝統魔法はオリジナル魔法に属していて、この世界に存在しない知識と融合することで生じるものなんだ。前世に住んでいた国の伝統と、深く関わっていたんじゃないかな?」

思えば、私の前世は日本伝統と考古学に占められていたよね。研究室で教授や学生さんたちと各地のお祭りや伝統行事などで沢山話し合い、時にはその取材で各地に向いたりもした。そんな前世の楽しい思い出を、トーイに説明していく。

「その楽しい思い出が、伝統魔法に繋がっているのさ。それと、君は二十五歳のわりに、子供っぽい話し方だけど、肉体年齢に引つ張られ、精神も幼くなっているようだね」

言われてみればそうかも。でも、全然違和感がないのは何故だろう? 前世と今世の性格が似ているせいかもしれない。この話し方、ハキハキと話せるから、精神年齢は十歳くらいかな。

「ユミル、今から大事な話をするよ」

「うん」

伝統魔法を取得したことで、トーイの警戒が完全に解けた。私は覚悟を決めて、先を促す。

「基本、神は地上に干渉できない。でも、君の居場所を金色に輝かせることで僕たちにその存在を知らせ、僕と君を出会わせた。そして、神は僕の目の前で、君に伝統魔法を与えた。全ては、カーバンクル族と君を救うためにね」

金色の光……そっか、神様は私を助けてくれたんだ。それなら、私はその思いを無駄にしたくない。今はこの魔法を成功させて、家族の魂だけでも、天国へと導いてみせる!

「有意義に使うよ!! 早速、儀式に必要なものを現場から漁あきってくる」

「漁るって……君、肝が据わっているね。それじゃあ探しやすいよう、周囲に反射のシールドを張ろう」

「ありがとう!!」

トーイがシールドを張ってくれたおかげで、転落現場も雨に当たらなくなった。私は覚悟を決め

て、家族の眠る現場へ戻る。

〇〇〇

今の時間がわからないから、太陽が沈まないうちに、魔法を発動させたい。ものが散乱する現場から、まずは白い封筒と赤いペンを探していく……あった!! この中から比較的濡れていないものを選んで、「御霊前」と書いて、それぞれの遺体に置いていく。鏡も見つけたし、精霊馬に必要な茄子と胡瓜も散乱している食材の中にあつた。細かく読んだ説明欄には、亡骸に動物がいる場合は、魂を精霊馬に移すこともできると書かれていたから、馬たちもきちんと黄泉の国へ送ることができ。散乱している荷物から財布を発見したので、そこから三枚の金貨を取り出して、残るアイテムは玉串だ。

「トイー、玉串か、玉串の元になる榊まきはっていう木はあるかな？」

「榊なら、君の目の前にいっぱい自生しているじゃないか」

あ、周囲の木々が全部榊なんだ。

「最後の一つ、清浄な光がまだだけど？ ユミルは、光魔法を使えるのかい？」

「ううん、使えない」

おかしいな、カーバンクルがいれば行使可能はず。「亡骸と鏡を照らす」は、光魔法じゃなくて、別の光ってこと？ ……私は空を見上げる。薄暗いけど、あの分厚い雲よりも高い位置は、ま

だ明るいはずだ。反射を使うとしたら、きつとここだよ。

「トイー、カーバンクルの力は「反射」なんだよね？」

「そうだよ」

「それなら、上空にある太陽の光を反射で集約させて、それを亡骸やこの手鏡に当ててほしい」

光を集約させれば、分厚い積乱雲だつて突き抜けることができるはずだ。

「なるほど、考えたね。太陽の光は、半永久的に変わることのない清浄なものだ」

これで、全てのアイテムが揃つた。まずは三人の亡骸を仰向けにして、平行に並べてから両手をおへその上に置いてあげよう。

「ふぬ〜ぬあ〜」

お兄様の亡骸、重すぎる!! ビクともしないよ!!

「何やってるの？」

トイーが不思議そうな顔を浮かべ、私を見ている。

「亡骸を綺麗に並べようよ」

「気持ちほわかるけど、四歳の身体じゃあ、どうやっても無理だよ」

そうだ、今の私は四歳の幼児だ。こんな小さな手足じゃあ、運べるわけないよ。仕方ない、このまま儀式を行おう。手順に関してはしっかりと覚えていくけど、気になるのは精霊馬かな。ここでは、日本のお盆で使われているもので代用可能とあるので、早速準備を進めていこう。

まずは、亡骸の前に、玉串を一本ずつ地面に刺していく。次に二頭の精霊馬、茄子と胡瓜に、それぞれ四本の葉のない小さな木の枝を刺していき完成させると、トイがそれらを観察して、頻繁に首を傾げているせいとか、凄く微笑ましい気分になる。日本のお盆で使用されるご先祖様を送迎するものは、これで合っている。次に、御霊前と書いた封筒の中に金貨を入れ、それぞれの亡骸に置いていく。

次は、トイのシールド範囲内に私の魔力を……。

「トイ、魔力の扱い方を教えて」

「あらら、四歳の幼女が知るわけないよね。いいよ、僕が儀式を発動させるのに必要な「魔力循環」と「魔力制御」を教えてあげる」

「ありがとう!!」

お父様、お母様、お兄様、待っててね。

必ず儀式を発動させるからね。

第二話 家族の願いとユミルの葛藤

雷鳴轟く豪雨の中をシールドに守られ、私は三十分ほどで体内での魔力循環とその制御に成功

した。

「前世二十五歳というだけあって、飲み込みが早いね」

この三十分の間に、練習しながら自分の前世について色々と楽しく話し合えたこともあって、トイとは距離を更に縮め、仲良くなることができた。トイの教え方が上手なこともあり、すぐに自分の中にある魔力を認識できるようにもなった。自分のステータスをもっと深く知りたいたいと思っただけ、雨が止んだら、護衛たちが私たちの死を確認しにここまで来るだろうから、それは後回しでいい。

「全部、家族のためだよ。絶対に、成仏させたいもの!!」

トイの話によると、人間の悪意に翻弄され亡くなった場合、怨念がその亡骸の魂にこびり付き、周囲を彷徨う浮遊霊となり、環境次第では魔物ゴーストやレイス、リッチと化す場合がある。通常幽霊は人の目に見えないけど、魔物化すると顕現してしまい、冒険者に討伐されると、その魂は消滅する。そんな悲惨な未来を回避するため、私はなんとしてでも儀式を成功させたい。

「それじゃあ、魔力をシールド内に放つね」

言われた通り、体内で魔力を循環させ、しっかりと認識してから手に集約させ、シールド内の大気中に少しずつ放っていく。

「ユミル、そのくらいでいいよ」

結局、必要量を充填させるのに、十分くらいかかってしまった。

ここから、儀式の開始だ。

「只今より「御霊送りの儀」を執り行います」

私は両手を合わせ、天上を見上げ神に祈ると、薄暗かった周囲が、シールドの範囲内限定で、仄かに青く輝き出す。その環境の中、トイーの力で、三人分の玉串と御霊前、三人の亡骸に清浄な光を天から照射させる。玉串と御霊前が優しげな金色の淡い光を放ち、す〜と大地に溶け出すと、次は家族の亡骸が金色に輝き出し、周囲が一気に幻想的な光景に切り替わる。

「なんて、美しい光景だ」

「うん、綺麗だね」

あ、三人の亡骸から何かが出てきた!!

「お父様、お母様、お兄様!!」

まだ四歳だけど、現世での家族との思い出は、しっかりと頭に刻まれている。それが走馬灯のように、次々とフラッシュバックしていく。

お父様が戸惑いながら、近くにいるお母様を見る。

「ここは……私は暗闇の中を彷徨っていたはずだが？」

「私も同じでした……ユミルちゃん？」

「僕もです。……え、ユミル、なんで泣いているの？」

お母様とお兄様が、私を見つけてくれた!! 家族と喋れる時間は少しだけ。無駄な時間を過ごし

たくないのに、涙が止まらないよ。

「うわあぁ〜みんながいる〜」

私はお父様に抱きつく。感激のせいで、言葉が出てこないよ。

「この惨状は一体……下には、私たちが寝ているぞ？」

「ユミルだけがないわ。まさか、馬の暴走事故で私たちだけ……」

「そうだよ!! 父さん、母さん、僕たち三人は、ユミルを残して死んでしまったんだ」

三人が自分の死に顔を見て戸惑っているところに、トイーが前に出てきてくれた。

「その通りさ。君たち三人は、転落事故で死んだんだ」

私が号泣するばかりで何も言わないから、トイーが助け舟を出してくれた。

「僕は精霊カーバンクルのトイー。時間がないから手短かに言うよ」

お父様たちはトイーを見ても、驚いて呆然としているだけだ。

「森を探索中、大きな衝撃音が聞こえてきたから、ここを訪れると、ユミルだけが軽傷で生き残っていた。彼女は事故のショックで前世の記憶を思い出し、僕と一時的な契約を結び、オリジナル魔法を使用できるようになった」

三人は事情を聞いているうちに、私の魔法に興味を持ち始める。

「今、まさにその魔法を行使している最中なんだ。君たちはユミルと触れ合えるし、会話もできるけど、その時間も限られているから、きちんとお別れの挨拶をしておいて。その後、三人は神様の

いる黄泉の国へ行くことになる」

トイー、私の代わりに事情を説明してくれてありがとう。

「なるほど、状況を理解できました。トイー様、娘に協力していただき、誠にありがとうございます。我々は死んでいる身である以上、娘との話を優先させていただきませす」

「うん、それが最善だね」

お父様はトイーに礼儀正しくお辞儀して、お礼の言葉を告げる。

「ユミル……君を置いて先に死んでしまった私たちを許しておくれ」

お父様は、足に抱きつく私の頭を優しく撫でてくれた。まだ三十代前半くらい、新規事業を立ち上げて、やっと軌道に乗ってきたのに、何かの陰謀で死んじゃうなんて……。

「不甲斐ない私たちでごめんね。ユミル、自分の家へ帰ってはだめよ。この事故は、多分あの人が仕掛けたものだよ」

お母様は三十歳くらい、お父様と一緒に苦労しながらも楽しく事業をやっていたのに……二人は自分のことよりも、私の心配をしてくれている。親って、みんながこうなのかな？ 前世の両親も、私のことを心配しながら海中で亡くなったのかな？

「父さん、これって絶対伯父さんの仕業だよ。多分、メイドか執事の誰かが、僕たちの旅行計画をあいつに密告したんだ!! 元々、馬車で駅に向かい蒸気機関車に乗る予定だったのに、街道の途中で盗賊と遭遇して、護衛と分断され、山の方へ追い立てられた。周囲には馱者の遺体もないから、

多分護衛全員が僕たちを裏切ったんだ」

歳の離れたお兄様は十四歳、学園の二年生で成績優秀、将来は騎士になると豪語していたけど、志半ばで死んじゃった。そんなお兄様も、自分の未練よりも、私を心配してくれている。

本来、ルナイスカ子爵家の次期当主は長男の伯父だったけど、素行の悪さが原因で平民へと身分を墮とし、弟のお父様が跡を継いだ。その仕打ちに、伯父は自分の両親と弟を憎んでいる。去年、父方の祖父母が相次いで病気で亡くなった時、伯父も自分の家族を引き連れ葬儀に参列したけど、一人だけ人に見えないようにほくそ笑んでいたのを、私は偶然目撃している。

伯父が、お父様たちを殺したんだ!!

憎い相手だけど、今家に戻っても殺されるだけで終わってしまう。

成人したら、みんなの仇を必ず討ってやる!!

「私は執事のセブロスとメイド長のサマンサに、旅行計画を詳しく話している。どちらかが内通者で間違いない。恐らく、護衛全員もグルだろう。ユミル、我が子爵家は、私の兄が跡を継ぐ。決して、家に戻るな!! 戻れば必ず虐げられ、いずれは殺される。厳しいことを言うが、誰も恨むな。復讐は、必ず連鎖する。我々は、いつでもユミルの心の中にいる。前を向き、笑って今世を生きていくんだ」

お父様の真剣な言葉が、私の心に響く。

誰も恨むな。

復讐は、必ず連鎖する。

私の目の前には、凄惨な遺体が放置されている。これを仕掛けたのは私の伯父なのに、恨んじやいけないの？ 復讐してはだめなの？ 伯父は自分の欲望を叶えるために、三人を殺したんだよ？ 心は憎しみでいっぱいだけど、両親やお兄様がそれを望むのなら……私はそれを叶えたい!! 「大丈夫だよ。私も、伯父さんのことが大っ嫌いだから戻りたくない。今の私には、精霊カーバンクルのトイーがいる。力の扱い方をトイーに学んで、一人で生きていく!! 復讐には走らない!! 約束する!!」

私の宣言を聞いたお兄様は、私の背中をポンつと叩く。

「ユミル、遅なましくなったな。前世の記憶を取り戻した人たちって年齢に関係なく、精神が遅なましくなると学園で習ったけど、真実なんだな。四歳とは思えないよ」

せっかくだから、私の前世のことも少しだけ話そう!! 年齢を知ったら、絶対安心してくれる!!

「お兄様、私は前世で二十五歳まで生きていたんだよ」

「二十五歳!?!」

「二十五歳!? 僕よりも歳上!?!」

お父様から少し離れて、胸を張って言った。三人とも私の年齢を聞いて、かなり驚いているけど、すぐに優しげで慈愛じあいに満ちた微笑みを私に向ける。

「そうか。二十五歳の精神なら、私としても安心して逝いけるな」

「そうね。精霊様もついているし、私も安心して逝けるわ。なんだか、これでお別れとは思えないわね」

「僕も、なんだか急に安心感が芽生えてきた。でもさユミル、周囲にいる奴らを無闇に信じるな、疑え。お前は四歳なんだから、誘拐ゆうかいされる危険性もある。まずは、自衛手段を身に付けるんだ」

お兄様からの真面目な忠告、これはきちんと聞き入れないといけない。

「うん、わかった。精霊カーバンクルの能力は反射なんだって。それを習得できれば、相手に触れられないようにできるよ」

これは、家族を安心させるための嘘だ。一時的な契約だから、いざれ使えなくなる。

私が悲しみの感情からようやく抜け出すと、突然茄子と胡瓜の精霊馬と亡骸の馬二頭が輝き出す。馬の魂が身体から出てきて、茄子と胡瓜に入っていくと、二つの光が一つに合わさった。光が収まると、二頭のユニコーンを繋いだ豪華な一台の貴族馬車へと変化しており、扉が勝手に開く。その光景を見た私たちは、固まってしまふ。

「あのヘンテコな茄子と胡瓜の精霊馬が、こんな劇的な変身を遂げるとはね。時間切れだよ、ユミル。三人に、お別れの言葉を」

トイー、もうお別れの時間なの？ この儀式は十日に一度しか行使できないから、絶対に乗ってもらわないといけない。

「お父様、お母様、お兄様。私は復讐に走らず、自分の好きなように悠々自適ゆうゆうじてまに暮らしていくから

心配しないでね。さあ、あの馬車に乗って!!」

「もうお別れの時間か……ユミル、お父さんたちは天国からいつでも見守っている。それを忘れるな」

「お父さんの言う通りよ。私たちは、貴方を愛しているわ」

「当然、僕もさ。ユミルは僕たちの亡骸なんて気にせず、ここを去るんだ」

みんなが、私に激励の言葉を贈ってくれる。前世のお父さんたちも、こう思っていたのかな？

今はもうわからないけれど、今世の家族に心配をかけたくないから、私はこの世界で楽しく生き抜いていくためにも、笑顔で三人を見送ろう。

「うん!! 私、頑張って生きていくね!!」

三人が笑顔で貴族馬車に乗ると、扉が閉じられ、馬車全体が輝き、ふわっと動き出す。すると、鏡が強く輝き出し、光の道が現れ、天上へと伸びていった。そして、ある地点から螺旋を描くように徐々に下ってきて、地上の貴族馬車へと到達する。私が安心したのも束の間、残骸となった馬車付近からドス黒い何かが無数に出現した。それらの先が手となって、ユニコーンの貴族馬車へと向かっていくけど、途中で消滅していく。

「トイー、あれって何!？」

「人の宿す悪意や憎悪が人から切り離され、魔物として具現化したもの。名称は、リバイブスペクター。憎悪対象に入る者たちを抹殺するまで無数に出現し、延々と追ってくる厄介な連中だ。『人々

の負の感情が魔物化する』っていう事象は、そうそう起こらないのだけど……」

伯父たちは、それほど私たち一家全員を憎悪していたってこと？ 何故、そこまで憎まれなきや

いけないの？ 私の方にも向かってきたけど、儀式中とあってか、途中で消滅していく。ステータス画面に記載されていた通り、どんな悪意にも干渉されないんだ。

「あ、貴族馬車が動く!! お父様〜お母様〜お兄様〜、天国に行っても、私を見守っていてね〜」

私が両手を空いっばいに振り上げると、三人が手を振り返してくれた。貴族馬車が空高く舞い上がると、そこから一気に急降下し、どんどん小さくなり手鏡の中へ入っていった。亡骸の光も消失し、周囲は薄暗いものへと変化していく。

「これで儀式は終了だ。荷物に関しては不審に思われないう、全部置いていく。ここから先は、僕のシールドで君を守るけど、さっきのように消滅しないから気をつけてね。さあ、憎悪の追手が届かないカーバンクルの聖域へ出発だ!!」

「聖域!？」

「精霊の住むエリア一帯を、『聖域』と呼称するんだ。君を聖域に入れて、あの悪意から君の存在を感じできないようにする。上手くいけば死んだと錯覚し、全て消滅するはずだ」

「そんな神聖な領域へ行つていいの?」

「勿論さ。君は、僕たちにとっての救世主かもしれないからね」

「へ？」

「詳しい理由は、到着してから話す。さあ、行くよ!!」

話し合っている間にも、手の数がどんどん増えていく。そして、荷馬車の上で右往左往していた無数のリバイブスペクターたちが、儀式の効果消失に気づいたのか、一斉に私の方を向く。もう、考えている時間もない。

「わかった、行こう!!」

お父様、お母様、お兄様。私——ユミルは平民として、今から一人で生きていくね。さよなら!! 私とトイーが駆け出すと、無数の手が一斉に追いかけてきた。

「細かいことは省くけど、君自身があの黒い手を受け入れられない限り、あれらは僕たちに対して絶対に手出しできない。だから、怖がらず、気にせず、全力で僕についてくるんだ」

「あんな気持ち悪いもの、受け入れられないよ!!」

反射のシールドにバシバシと弾かれるも、諦めることなく、私目掛けて追ってくる無数の黒い手。トイーを見失わないよう、目的地まで全力で走ろう。

○○○

「ユミル……遅いよ……」

「ひい……無茶言うな……」

トイーは四足歩行で小さいこともあって、駆け抜けるような速さだけど、こっちは四歳の幼児の身体。全力で走れと言われても遅いに決まっている。私とトイーは、直方体の反射シールド（横十メートル・縦二十メートル・高さ五メートル）に覆われているから安心だけど、それでも私から五メートルほど離れた後方と側方に、無数のリバイブスペクターが唸り声を上げながら、私のシールドに張り付いては弾かれるを繰り返している。

私が奴らを受け入れることは、絶対がない。そんな心理的安心感があるとはいえ、後方から意味不明な声をあげて迫り来る無数の触手のような黒い物体は恐怖そのもの、必死に走り続けているけど、体力が尽きそう。

「ユミル……全力で真剣に走っているのはわかるけど、もっと速く走れない？」

こっちは体力も空に近く、全身汗だく状態、息切れで呼吸も苦しいのに、平然とした顔で語りかけてくるトイーの言葉に、ムツときた。

「四歳の身体……舐めんな!! 人間の幼児の……体力で……全力疾走が長く……保つわけ……ない……でしょ」

私は限界を迎え、歩みを止め、四つん這い状態となる。もう限界、目眩も激しいし、これ……やばい……多分、脱水症状……だ。幼児の身体を舐めてた私も悪いけど……このままじゃ聖域に辿り着けない。私の怒りの言葉に、トイーが申し訳ない表情となる。

「ごめんね。人と百年間関わっていないこともあって、人間族の幼児の体力のなさを失念してい

たよ」

それって、他の種族の幼児は私よりも、体力があるってこと？

「初めから、この形態で行くべきだったね」

あれ？ トーイの形が別の何かに変化したような？ 目の焦点が合っていないせいで、それが何かわからない。誰かが、私を優しく抱き抱える。

「え……あれ……」

「君は、ゆっくりと休んでいるといい」

そう言われ安心したのか、私の意識はそこで途切れる。

第二話 聖域に住む精霊カーバンクル

……眩しい。家族とお別れを済ませてから、どうしたんだっけ？

迫り来る無数の黒い手は、私より速いこともあり、私とトーイの周りに張られた長方形の反射シールドにぶつかり、執拗に殴ってきたことを覚えている。恐怖に怯えながら、私は足場の悪い中を必死に走り続けたけど、体力の限界を迎えてしまい倒れて、誰かに抱えられたような？ ……だめだ、そこから先を思い出せない。あれ？ 身体が濡れてないし、私の下着も服も乾いている。泥だらけで汚かったのに、洗濯したかのように綺麗になってる。

「おはよう、ユミル。君は途中で力尽きて、そこからは僕が抱き抱えて聖域へと到達したんだよ」

「トーイが？」

四足歩行のトーイが、どうやって私を抱えたのだろうか？ 人にでもならない限り、無理だよな？

「そうさ。聖域に到着して、十五時間ほど経過している。そのまま放っておいたら間違いなく風邪をひくから、聖域の湧き水を飲ませたよ。君の身も心も全快しているでしょ？」

身も心も？ そういえば、脱水症状もないし、身体の疲れも全く感じない。それだけじゃなく、アレだけ凄惨な経験をしたのに、心が軽い。

「聖域の湧き水の効果って凄いね。身も心も軽い、全快してる」

トーイは私の言葉に、ニコツと微笑む。

「良かった。ついでに、汚れていた衣服類も脱がして、綺麗に洗浄浄化しておいたから」

四足歩行の精霊が、どうやって私の服を脱がしたのか気になるけど……そっか、私はトーイに素っ裸にされても、全然起きなかつたのか。昨日の一件、私にとって衝撃的なことばかりだったから、肉体的にも精神的にも疲れていたんだね。

私の家族は、もうこの世にいない。前世の時のように、私を助けられる親戚もない。私自身の力で、生き抜いていくしかない。幸い、トーイのおかげで、体調も万全だ。

「仲間たちが、君の声に気づいたようだ。周りを見てごらん」

言われるがまま周囲を見渡すと、そこは森の中だけど、神聖な雰囲気醸し出しており、嫌な香

りも全くしない。

「え!？」

茂みがかさがさと急に動くものだから警戒すると、一体のフワフワモフモフのカーバンクルが出現。それをきっかけに、あらゆる方向から大勢のカーバンクルたちが一斉に出現し、私はいつの間にか、モフモフたちに囲まれていた。

「フワフワモフモフが沢山いるくくく」

ここは、モフモフの天国みたいだ。みんな、トイに似ているけど、毛色や額の宝石らしき角の形態が微妙に違っていて、それぞれに個性がある。まずは、私から自己紹介しよう。

「初めまして。私はユミルだよ」

貴族の苗字は、もういらぬ。私は、あの家に戻るつもりはない。みんな、私に興味を持ってくれたのか、少し近づいてくるけど、明らかに警戒されている。今世の私は四歳、そのせいでの世界の知識に乏しい。精霊の存在は前世の小説で知っている程度、小説の設定と違うかもしれないと思い、私も警戒モードに入る。

「大丈夫、皆ある事情で、全ての人間族を警戒しているのさ。たとえば、戦闘能力のない幼児であってもね」

幼児ですら警戒って、人間族はカーバンクルたちに何をやったの？

「君の抱える事情も既に話しているけど、こっちの抱える事情もあつて、君を信用しきれない

んだ」

「力を貸してほしいと言っていたよね？ どんな事情を抱えているの？」

「僕からは、軽々しく言えない。詳しくは、僕たちカーバンクルの長が話してくれるよ。長との話し合いの前に、まずは腹拵えだ。昨日から何も食べていないから、お腹ぺこぺこでしょ？」

そういうえば、事故以降、何も食べていないし飲んでもいない。脱水症状を起こすわけだよ。体調が戻ったせいか、お腹が「キュ〜」と鳴ってしまふ。

「あはは、ご馳走になります」

トイは、大きな葉っぱを私の方に差し出す。葉っぱの上には、見たことのない木の実が沢山ある。その横には半分に分かれたヤシの実に似たものがあり、そこには白っぽい半透明の液体が入っている。木の実を一個一個頬張ると、それぞれが異なる味で美味しく、液体の方もパイジュースに近い味わいだ。勢いよく食べたことで、あつという間に完食した。

「今から長のもとへ案内しても大丈夫？」

「お腹いっぱい、元気満タン!! 問題なしだよ!!」

起きて早々の話し合い。緊張するけど、カーバンクルを助けると宣言した以上、今度は私が恩を返す番だ。

トイは私を連れて、一際大きな樹の根元へと移動する。そこには、トイより三回りほど大きいカーバンクルと、二回りほど大きいカーバンクルがいる。大きい方は目つきも鋭く、威風堂々とした貫禄がある。小さい方はそこから五メートルほど離れた位置で、身体を丸めて眠っている。

ここで一番不思議なのは、小さい子を中心に半径一メートルほどの半球形反射シールドが張られていること。そして、そのシールドを半径四メートルほどの大きなシールドで囲っており、外側と内側の間の区域には、私を執拗に追ってきたあの触手——リバイブスペクターがいて、近くに置かれている大量の西洋人形の身体に入ったり出たりを繰り返している。これは、明らかに異様な光景だよ。正直言って、怖い。

「長、ユミルを連れてきました」

大きい方のカーバンクルが、じつと私を睨む。目つきの鋭さのせいもあって、お世辞にも可愛いとは言えない。

「皮肉なものだ。父は人間族のせいで苦しんでいるのに、その柵を断つかもされない者も人間族とはな。私はガルト、カーバンクル族の長だ。こちらで眠っているのは、私の父で、先代長だ」

「ユミルといます」

この人の声、冷酷な声色のせいで、余計に怖い。さっきの言い方から察するに、人間族は現長の父親に何かをやったせいで敵視されているようだ。

「神が何故幼児を我々のもとによこしたのか、不思議でならん。異世界の記憶を持つ転生者、そし

て生まれ故郷の伝統を魔法化した伝統魔法か」

大勢のカーバンクルが私の動向を周囲から窺っているせいか、凄くやりづらい。とにかく、恩を返すと決めた以上、まずは事情を聞かなきゃ。

「長は、私に何を望んでいるのですか？」

「ほう、今の状況に臆せず、私に事情を聞いてくるか。スキル「鑑定」によると、其方のステータスに称号「転生者」がある。なるほど、四歳で覚醒直後であるならば、この世界の人間族よりは信用できる」

スキル「鑑定」？ 両親から教えてもらった内容によると、他者のステータスを、無断で覗ける効果があったよね？ どうやら、この世界にはプライバシーというものが無いようだ。私自身、自分のステータスを確認していないから、少し怒っています。

「人のステータスを、勝手に覗かないでください!!」

「すまん。我々は今人間不信に陥っている。奴らのせいで、私の父がこうなり、カーバンクル一族が絶滅の危機に瀕しているのだからな」

絶滅の危機!? 私の伝統魔法で、カーバンクルの事情を解決できるか不安になってきた。

「ユミルよ、私の無礼を許してくれ。まずは事情を語る前に、一つ忠告する。全てを明かしてしまつと、其方自身も巻き込まれてしまい、この問題を解決しない限り、この聖域から出られなくなる」

ええ!? それは、トイから聞いてない!! これって脅し? でも、ガルト様からはそんな様子を感じないから、その事情が大きく関与しているってことか。私は天涯孤独の身、ここで断ったら間違いない、一人で森を抜け出ないといけない。それならいっそのこと、巻き込まれましょう。

「構いません。たった一人で、この森を抜け出ることなど不可能。どうぞ私を巻き込んでくださーい!!」

「ふ、見上げた根性だ。感謝するぞ、ユミルよ」

ここから何を言われるのか、ドキドキしてくる。どうか、私の伝統魔法で解決できる内容であつてほしい。

「まず、現在の状況を説明しよう。この聖域に住む精霊カーバンクルは、リサイドラ王国の王都に住む貴族のせいで、約百年間、聖域という牢獄ろうごくに閉じ込められている」

百年!? そんな長期間も、ここに閉じ込められているの? ず〜つどこにも出られず、同じ場所に居続けるのは拷問だけど……なんか矛盾してない?

「質問、いいですか?」

「構わん」

「トイは、その聖域を出ていましたけど?」

「当然、それには理由がある。だが、それを話す前に、我が父の事情を説明しよう」

カーバンクル絶滅の危機、つまりこの世界のカーバンクルは、この聖域以外にはいないというこ

と。そこに、どんな事情が隠されているのだろうか?

「今から百三年前、先代長ロカはこの国の上位貴族の令息と、この森の中で偶然出会い、友人関係を築けたこともあり、精霊契約が結ばれた。そして——」

カーバンクルの抱える事情、それは思っていた以上に深刻なものだった。精霊のみが持つことを許されるスキル——獣人、エルフ、人間などの人族はそれを「エレメンタルスキル」と呼称している。この精霊特有スキルを取得する唯一の方法が「精霊契約」。人族の中には、スキル欲しさで契約を求める者が多い。

今から百三年前、先代長ロカ様はこの森の中で、偶然一人の貴族令息と三人の護衛冒険者と出会った。令息はカーバンクルという種を愛し、出会いを求めため、ここへ来たことを告げる。エレメンタルスキルを求めない無欲な青年であったこと、とても穏やかで心も清浄であったことから、ロカ様は彼と精霊契約を結ぶ。

後に、彼に問題点こそなかったものの、その家族に大きな爆弾があったことに気づかされる。家族連中は令息を懐柔かいじゆうして、先代長ロカ様を召喚させると、有無を言わせることなく強制的な隷属れいぞく契約を結ばせ、エレメンタルスキル「反射」を占有した。そして、それを未来永劫保たせるため、五つの隷属誓約を結ばせた。

①今後、我が一族以外との精霊契約を禁じる。

- ② 今後、許可が下りない限り、我々との隷属契約を他者に公言してはいけない。
 - ③ 今後、活動範囲を聖域のみとする。
 - ④ 他の精霊たちとの出会いを禁止する。
 - ⑤ 我々との契約破棄または、契約の破壊行為を禁止とする。
- 破った場合、ロカ自らが一族全てを抹殺し、自身も自害すること。

隷属契約である以上、命令に背けば、先代長ロカ様は死ぬ。元々、カーバンクルたちはこの国を中心に活動していたけど、一族全員がロカ様の命令により連れ戻され、以降約百年間聖域のある森に閉じ込められてしまう。他の精霊との出会いも禁止されている以上、巻き込むわけにはいかない。破れば絶滅なのだから、破れるわけがない。完全に逃げ道を塞がれているので、トイたちはこれまで何もできず、百年間も聖域の森という監獄に閉じ込められている。

「ガルト様は私に話しましたが、契約違反では？」

「本来はそうなる。だが、契約内容の『我々』が貴族側ならば、『他者』という言葉は、父以外のことを指す。にもかかわらず、契約違反に該当されていない」

厳密に言うると、そうなるのかな。

「貴族側もこの矛盾に気づき、慌てていたのか、すぐに『聖域内にいる者たちは除外する』と付け加えた。聖域の外周部は神聖結界で囲まれており、魔物の侵入を許さない。結界内にいる者は、

カーバンクルのみと考えたのだろう」

つまり、私が聖域から逃げ出した瞬間、契約違反が発動され、先代長による虐殺が始まる。なるほど、今忠告の意味を真に理解しました。

「先程のトイの件の答えを聞いてもいいですか？」

聖域は神聖結界内を指しているから、トイは聖域外に出ていることになる。

「簡単なこと。そもそも、『聖域』と呼ばれる範囲を決めているのはカーバンクルの長だ。つまり、『聖域』を神聖結界内ではなく、この森全体に変更しただけのこと。私が長になった時点で、仲間たちは聖域に閉じ込められた影響で、ストレスを蓄積させていた。そこで契約の穴を探り、思いついた案が神聖結界の範囲を固定しつつ、聖域の範囲だけを変更することだ。これは、私が皆に変更を伝えるだけで事足りる。流石に、誰が神聖結界の外に出るかで揉めたがな」

なるほど、それは契約違反に該当しない。

「行動範囲がかなり広くなったことで、ストレスもなくなったと？」

「大幅な軽減に成功したが、それが私のできる限界だ。では、続きを話していこう」

「はこ」

貴族の所業は、これだけで終わらない。精霊と契約することで取得できるエレメンタルスキルは、通常のスキルと違い、かなり強力だ。そのため、このスキル類にだけレベルが五つ設定されており、強（S）↓A↓B↓C↓D）弱が定められている。契約当初は誰であろうと、「D」からのス

ターゲットだ。契約者が反射の扱い方と制御能力を契約精霊に認められたら、レベルを上げていく仕組みになっている。

貴族は先代長に対して、家族全員に「S」の力を付けるよう命令したけれど、それが契約者以外不可能とわかると、家族には限界とされる。「B」、それ以外の一族全員には「C」を付けさせた。これにより、家族全員が反射を利用して国内でのしあがる。内紛が起きた際、国王の敵となる者を力で強引にねじ伏せ、王族から絶大な信頼を得ることに成功し、莫大な富と名声を築き上げた。

先代長口力様は、貴族の力を少しでも削ぎ落とすため、長としての力を息子ガルト様に継承させた。精霊の「長」という地位は、称号としてステータスに付与されると、身体が大きくなり、能力もその個体の持つ資質次第で、大幅に引き上げられる。それをガルト様に引き継がせることで、貴族の持つ反射の力を弱体化させる行為が、彼にとつての精一杯の抵抗だった。

「酷い……家族は私利私欲のために、口力様を利用したのか。そもそも、契約者の青年の行為が許せない。なんで、懐柔されるかな？ ガルト様、口力様の身体の具合は？」

言った瞬間、ガルト様は悲しげな顔となる。

「あの一族共は相当欲深いのか、憎悪する者たちが年数の経過とともに増えていった。奴ら自身の力で討伐しきれない一端が隷属契約の影響で、先代の長の魂に憑いてしまい、食べられぬよう反射の力で抑えているが、年々身体を蝕むようになっていった」

だから、あんな弱々しい姿なのか。

「契約前に集めていた人形を身代わりの依代よしろとして、父から憎悪を移すことで、これまで負担を減らしてきたが、それももう限界だ。私の見立てでは、父の寿命はあと二週間ほどだろう。このままの状態で亡くなると、蓄積されていた憎悪が、どんな影響を及ぼすのか、私でも想像つかん。最悪の反射でも御しきれないほどのエネルギーが発生し、聖域そのものを吹き飛ばす可能性もある」
それって大変なことだよ!! 逃げ道だって完全に塞がれているから、幼児の私に頼らざるを得なくなっただけなのか。

「わかりました。私の残された二回の転生特典と未知の伝統魔法に、全てを賭けるといふことですね？」

「察しの通りだ。すまない、其方を完全に巻き込んでしまった」

私のやるべきことは、「先代長口力様を貴族共の呪縛から解放する」だね。あの転落事故とトイーとの出会いがキッカケで入手した「御霊送りの儀」。トイーはその力を目の当たりにして、私なら口力様を解放できるかとも思ってくれたんだ。私に憎悪や怨念を祓える力があるのかわからないけど、命の恩人が困っている以上放つてはおけない。

それに……そういったものを祓える日本伝統を、私は知っている。あくまで伝統であって、そういった効果が本当にあるのかはわからないけど。

「私、やります!! 私、トイーに助けられました。その恩を返す番です!!」

私の不安なき言葉に、周囲のカーバンクルたちの視線が私に集中する。

「良い目をしている。転生特典というのは、人の人生において通常一回しか起こらない事象だ。その際に表示される選択肢のどれもが、通常のものより遥かに強い効果がある。選択次第では、世界最強にもなりえるだろう。そういった地位や名誉を捨て、我らを救う道を選べるか？」

一回目の転生特典では、選択肢に「経験値×10倍」があった。あれを選べばチートキャラと化して、いざ世界最強になっていたかもしれない。

「私は、そんな自分本位な道を選びません!!」

「覚悟を決めたか……頼む、私の父を……先代長を貴族の呪縛から解放放つてくれ」

「はい!!」

今度は、どんな選択肢が出るの？ 願わくば、私を迷わせるものは出ないでほしい。深く眠っている小柄なカーバンクルのもとへ恐る恐る歩いていき、反射シールドの前に辿り着いた時、ステータス画面が私の目の前に表示された。

第四話 ユミルに与えられし試練

【二回目の転生特典、次の二項目から自分の望むものを五分以内に一つ選びなさい】
来た!! どんな内容かな？

①一つの浄化系スキルと一つの伝統魔法

②蘇生魔法「リザレクション」

↓遺体が存在する場合に限り、黄泉の世界から魂を呼び寄せ、身体の傷を完治させた

状態で、死者を完全蘇生させることができる。

究極の二択だよ!! これは、完全に試されている。時間だつて、五分もあるもの。……待つて、揺らいだらだめだ!!

常識的に考えて、②を選んだらだめだよ。多分、これを会得してもカーバンクルを救えると思う。先代長を一度死なせて、全ての呪縛から解放させ、後に魔法で蘇らせる。理論上可能だけど、これは絶対にやってはいけない行為だ。こんな魔法を会得したら、この世界の常識が変わってしまうもの。

それに、①と②の消費魔力量がわからない。伝統魔法の場合、前回は今の私の魔力量でなんとかだった。でも、②はこの世界の魔法だ。そうなると、私の魔力量を大きく上回る可能性がある。②を選んで消費魔力量が10000とかだったら、目も当てられない。私は、カーバンクルにも家族にも恨まれたくない!! 当然、選択するのは①です!!

【スキル「異界読経」、伝統魔法「永代供養」を入手しました】

スキル「異界読経」

異界の読経を行うことにより、相手を縛るあらゆるものを無へと昇華させるが、発音次第で威力が増減するので注意すること。ゾンビ、リッチ、レイス、スペクターなどの不浄系モンスターに対して、絶大な効果をもたらす。

伝統魔法「永代供養」

憎悪・怨念などの影響で魔物化した無生物や生物をエレメンタルスキル「反射」で閉じ込め、内部に異界読経を浸透させることで、あらゆる思念と束縛を全て無に帰すことができる。

異界読経はこの世界にとって怪奇そのもの。魔物化した思念体は、これを聞いても理解不能であるため、対抗策を生み出すことなく、苦しみながら無と化す。なお、これは有無に変換させる行為であるため、「破壊」に該当しない。

詠唱 …「永代供養、始めます」

消費魔力 …50

完全浄化させるための達成条件

①精霊カーバンクルとの精霊契約

↓契約不可の場合は、協力関係を築き上げること

②浄化させたい者に対しての感謝の祈り

↓数が多ければ多いほど、異界読経の威力を底上げしてくれる

↓祈る内容が同一で、その数が多ければ多いほど、救いの力が増す

③清浄で静寂な空間

④憎悪などを逃がさないための反射シールド

やった!! これこそが、今望むもの!! これって、日本のお坊さんとかがやる供養方法に近い。

私、お坊さんじゃないけどできるかな? そもそも「読経」と言われても、私の知るものといえば「般若心経」しかないけど、破壊ではなく無に帰すのなら、契約違反にはならない。これなら私も、精霊カーバンクル族を救済することができる。

「その様子だと、正しい選択肢を選んだか」

ガルト様は、ほっと胸を撫で下ろし、優しい目で、私を見る。

「ユミル、何が出てきたの?」

トーイは気になったのか、私の前に来てくれた。

「あのね……」

私が、「異界読経」と「永代供養」の二つをカーバンクルたちに説明すると、自分たちの望む力

だったこともあり、皆が喜んでた。けれど、読経の意味がわからないとトイに言われたので、ガルト様がロカ様と魔物を刺激しないよう、周囲の音がシールド内に入らないよう調節してから、私が試しに声に出してみる。

「おい、止めてくれ!! これが異界の言葉か、頭がクラクラする」

「おかしなリズムで歌う言葉のせいか、頭が変になりそうだ」

長やトイだけでなく、周囲にいるカーバンクルたちからも、抗議が殺到する。異界の言葉とはいえ、苦しむのは死者だけのはず？

「読経は五分くらい続くよ？ 異界の言葉だし、長もトイもこの独特なリズムと声に慣れてよ。

それに、「永代供養」を成功させるには、暴れる思念を外に行かせないよう、シールドの保護が必須なの。これは、感謝の祈りを伝えるカーバンクルたちにも言えること」

長もトイも周囲にいるみんなも、露骨に嫌そうな表情を浮かべる。

「五分だと……く、だが父を救うためだ」

「長、まずはこの読経とやりに慣れましょう。ぶつつけ本番でやったら、心を乱し、絶対失敗します」

トイが、そこまではつきり言うとは。

「まずは、「異界読経」に慣れるか。念のため、ここから少し離れた場所で行おう」

読経は独特な言い回しだから、変な感覚に陥るのはわかる。日本の宗教にも、色んな文化があっ

て面白いと思ったけど、初手でこんな大掛かりな儀式に挑むのは危険だから、私もしつかり練習しよう。

私たちはロカ様から少し離れた場所で、二時間練習を重ねたことで、私も皆も読経の持つ特殊なリズムに慣れた。「感謝の祈り」は、眠っている先代長の精神を現実世界に呼び起こすためにも必要で、数が多ければ多いほど、効果が高まる。でも、そこに雑念が混じると、効果が薄くなってしまうので、カーバンクルたちは苦痛ともいえる異界の言葉を聞き慣れるまで、真剣に念じ続けた。

そして、いよいよ儀式を始める時がやってくる。私やカーバンクルたちが先代長ロカ様のもとへ戻ると、ガルト様が後方に控える同胞たちも入るよう、大きなシールドを張る。

①ロカ様を守護するシールド。

②その外側にある、ロカ様を狙うリバイブスペクターと人形を囲むシールド。

③更にその外側の、私たちを守護する大きなシールド。

現在、合計で三つのシールドが展開されている。また、これらのシールドの特性は、使用者によって定められている。

立ち読みサンプル
はここまで

- ①リバイブスペクターたちは、シールド間を移動できない。
- ②私の読経のみ、内側の二重のシールド間を素通りする。
そして、それが周囲に響くよう、外側のシールドでは反射する。

私の声を、内側のシールド内にいる先代長口カ様と魔物に聞こえやすくするための工夫だろう。私の近くに、ガルト様とトイーがいて、その周囲を囲むように、他のカーバンクルたちがいる。私を疑う怪訝な視線はなく、皆が私に全てを託してくれている。周囲を見渡し覚悟を決めたところで、私は先代長口カ様とその周囲を気持ち悪く蠢く魔物たちの前へと進む。とても怖いけど、今の私にとって、命の恩人でもあるカーバンクルに恩返ししたいという思いの方が断然強い。

「ガルト様、始めますね」
「頼む」

「永代供養」、始めます!!

私は、こういった光景をテレビ画面でしか知らない。こうして間近で見ると、伝わってくる恐怖感がテレビ画面のものと、まるで違う。

全身が震える。大丈夫、カーバンクルを信じろ。

負けない、負けない、私は絶対に負けない!!

皆が私を信じるように、私も仲間たちの祈りを信じるんだ。

先代長口カ様を必ず助ける!!

仲間を信じ、最後まで一語一句間違わず、リズム良く言葉を紡ぐんだ。

「異界読経」を成功させる上で、この思いの強さこそが絶対条件!!

この場には私の求める木魚などがない以上、日本で学んだ記憶を呼び起こして、言葉をリズム良く発していくしかない。私は雑念を捨て心を無にし、目を閉じ、感謝の念だけを携えて、周囲に何が起ころうとも、皆を信じ決して動じず、誠心誠意カーバンクルのための読経を始める。

○○○

ユミルが伝統魔法「永代供養」を發動させ、「異界読経」を始めるのを、僕——トイーは眺めていた。「御霊送りの儀」も、独特な手順で実施され、これまでに見たことのない幻想的な光景だったけど、こっちの「永代供養」も凄い。あの独特なリズムで発せられる言葉に慣れたおかげで、周囲の状況が良く見える。僕を含めた皆が先代長にとってもお世話になっていたから、これまでの感謝の念を真剣に念じていくと、それが美しい緑の玉になって、外へと浮かび、それらが次々と先代長の身体へ入っていく。身体全体が仄かに緑色に発光し、死の淵にいた長自身の力が、内から少しずつ蘇りつつあるのを感じ始める。

黒い憎悪の塊ともいえるリバイブスペクターは、「異界読経」の影響でドスの利いた大声をあげ、気持ち悪いくらい暴れているけど、シールドの目の前にいるユミルは目を閉じ、そんな声に怯むこ